

うっかりさん 詩歌文集『櫛になれる気がしている』 発売記念トークイベント開催



トークイベントの様子

徳島文学協会会員で、俳人のうっかりさんの詩歌文集『櫛になれる気がしている』が発売されたことを記念し、トークイベントが二〇二四年十月十三日に徳島市の書店平惣徳島店にて開催された。

徳島文学協会の佐々木義登会長とのトークイベントでは、発刊に至る経緯や掲載作品の紹介、「うっかり」という俳号の由来などが語られ、来場者は興味深く聞き入っていた。

トークイベントの後はサイン会や本の販売が行われ、来場者はうっかりさんの作品の感想を述べるなど、和やかな雰囲気での交流が行われた。



徳島新聞 2024年11月5日付



定価 1600円＋税
新書版(170×105mm)
242ページ／並製

<https://inumachi.main.jp/hyappiki-books/>

『櫛になれる気がしている』は紀伊国屋書店徳島店の週間ベストセラーに入ったり、徳島新聞文化欄で紹介されたりするなど、注目を集めている。

徳島県内の書店のほか、出版レーベル「百匹ブックス」のオンラインストアなどで購入できる。

「小説実作入門講座」

改訂新版発売

この度、徳島文学協会会長の佐々木義登が執筆した「小説実作入門講座 めざせ！文学賞」の改訂新版が電子書籍で発売されました。

全ての作家に欠かせない心構えやテクニックをわかりやすく解説しています。文学賞を目指す小説を創作する上で大切なエッセンスが詰まった一冊です。

【佐々木会長よりコメント】

これから文学作品を書くこととされている方へ、初心者の方でも文芸作品が執筆できるように、大幅に加筆修正しました。

文学作品の執筆にチャレンジしてみたい方、文学賞の一次選考突破が難しい方、ぜひご一読いただけましたら幸いです。

ご購入はこちら



藤代淑子さんエッセイ掲載

第二十二回三田文学新人賞奨励賞受賞の徳島文学協会会員、藤代淑子さんのエッセイ「再生可能な」が『三田文学』No.158(二〇二四年夏季号)に掲載された。

購入は三田文学ホームページから

<https://www.mihabungaku.jp/backnumber158.html>



短歌イベント「みんなで歌会」を

開催しました

歌人の田丸まひるさんを講師にお迎えして、二〇二四年十一月二十三日
に短歌イベント「みんなで歌会」を開催しました。
協会員で俳人のうっかりさんによる報告記をお届けします。

田丸まひるさんの みんなで歌会報告記

うっかり

十一月二十三日(土) 文学書道館にて田丸まひるさんが講師を務めた「みんなで歌会」に参加してきた。開始時刻を待っていると、知り合いが京都から参加しており、久しぶりの再会に歌会が終わったらどこかに出かけようなどと話をしていた。そうしているといつの間にか参加者は十人も揃い、口の字の形に皆さん席に着いていた。年代も様々でベテランもいれば今回初めて短歌を詠むという初心者も何人かいて、その初心者たちに引きずられてか若干の緊張感が漂っていた。いや、それだけではない。なんとラジオの取材が入っていたのだ。そのリポーターも歌会に参加するということでの緊張だったのかもしれない。コードレス掃除機かなと思

うぐらい大きな風防に包まれたマイクが準備され、まひるさんに至ってはピンマイクを付けられていた。

七曜スタイルと説明された歌会の進行方法は隣同士の二人が一組になって、どちらかが歌を読み上げ、二人それぞれが歌を鑑賞し終わると後は誰が発言しても良いというような形だ。もちろん短歌は無記名で作品だけが一首ずつプリントされ、それぞれに配布されている。講座参加の申し込みの時点で送った短歌はランダムな配置であっただろうと思うが、私の歌がプリントの一首目に配置されていた。大きなミスをしていないだろうか。など不安になりながらも最初の組であるまひるさんと佐々木会長にとっても有難い鑑賞をして頂いた。その他にもいくつかの読み方を提示していただいていたとても勉強になった。その

後も同様に参加者の歌が皆に鑑賞されいき、歌会と講座の両方を行う予定であったが、みなさんの鑑賞が活発に出たこともあり、歌会だけで一時間三十分が過ぎてしまった。最後にまひるさんから紀野恵さんの歌をいくつか紹介して頂いて、みんなで歌会は終了した。

月に二首ずつしか私は短歌を詠まないが、詠むのはもちろん楽しい。それ以上に楽しいのは歌会だ。自分の歌の推敲のヒントになることはもちろん、他の方の歌についてもいろいろ読み方が聞けて楽しい。小説の読書会が好きなら、歌会も好きになると思う。間違った発言をしてしまったらどうしよう。短歌の知識なんてないし……。という不安になるかもしれない。でも、短歌は正直下手でもいいと思う。あーだこーだと短歌について話し合う。あるいはそれを聞く。そこに上手い下手は関係ない。楽しんでるもの勝ちではないだろうか。



「民雄忌」

北條民雄を偲ぶ会

が開催されました

阿南市の作家北條民雄の功績を顕彰する「民雄忌」北條民雄を偲ぶ会」が、二〇二四年十二月五日に阿南市文化会館夢ホールにて開催されました。

オープニングで北條の童話「すみれ」を原作とし、城北高校の大窪俊之教諭が脚本を担った演劇が披露された後、大窪教諭と徳島新聞社生活文化部の柏木康浩記者による対談「教育現場と北條民雄」が行われました。

偲ぶ会は、阿南市文化会館と一般社団法人徳島新聞社による主催、徳島文学協会と阿南市文化協会による共催で開催されました。

事務局だより 前号作品【書評】菊地さん、「コード・ブレイカー」興味深い内容なので読んでみたいのです。【エッセイ】涼野さん、いかに学ぶかについて考える機会をいただきました。花里さん、世代は随分違いますますが楽しく読ませていただきました。【詩】中本さん、心に風が吹き抜けていきます。青野さん、静かな一瞬と永遠の世界があります。作田広場【詩】中本さん、優しさにあふれています。これからもみなさんの作品を楽しみにしています。

【エッセイ】 真面目な相談

イトウエン

「オーエケンザブローが解らない」という相談を受けた。オーエ先生のエッセイ「恢復する家族」を読んでいるが、さっぱり解らない。解説してくれないか。スタバでそう嘆く彼は、困惑した様子で私に本を寄越した。

彼は微積と物理が好物の工学部出身エンジニアだ。話題のコミックやライトノベルの内容を深読みして楽しむ、いわゆる考察系オタクでもある。推しキャラの心理を語り出すと止まらないし、複雑な展開や伏線を楽しむことにも慣れている。その彼が、と思うと妙な気がした。それに彼は普段エッセイを読まない。

めずらしいねと本を手にとると、友達に薦められたと、くぐもった声を出した。想像だが、笑顔の愛らしいジャンパーズカートの読書家に薦められたに違いない。

「だけど、私だって解らないよ」

オーエ文学は難解で有名だもの。手に余ると正直に伝えたらと提案すると、駄目なんだと彼は肩を落とした。感想を聞かせてねって手渡されてね。俺、ライトノベルなら二時間で一冊読めるのに、この本は一週間で二冊しか読めていない。次、友達に会うまでに概要だけでも掴みたい。協力してくれ。

この本は私の書棚にもある。障害を持って産まれてきたオーエ先生のご子息についてのエッセイだ。人間がその人らしいやり方で恢復する様を、時にシリアスに、ユーモラスに綴っている。ジャンパーズカートさんがこれを手渡した理由が解る気がした。生真面目で頑張り屋の彼は、時折疲れた表情を見せる。題名からも内容からも彼への思いが読み取れた。

子供の頃、オーエ先生をテレビで見た。素敵な丸眼鏡を掛けたおじさんだった。彼はとても穏やかに恥づかしそうに小説について語っていた。何気ないワンシーンだ。それを今も憶えているのは、おじさんのまなざしが異様だったためだ。獲物を狙う猛禽の、底光りするまなざしだった。カメラ越しに感情の動かない目で鋭くこちらを観察している。そこには上空からひたひたと迫り、隙あらば獲物の心臓をつらぬき屠ろうという不穏さがあった。語り口とまなざしのアンビバレンスに幼い私は不安になった。それがオーエ先生だとわかったのはずっと後だ。昨年、メディアで大々的な追悼特集が組まれ、巨大な鳥が彼岸へ飛び立ったと知った。

話を「恢復する家族」に戻そう。彼は多種多様に嘆いたが、まとめると文章が読みにくいというのが本旨のようだった。あとさ、家族構成が解りづらいよね、と彼は腕を組んだ。

文章云々はこの際置こう、と私も組んだ。だけど家族構成は読みながら把握できるよと反論すると、それはタイムパフォーマンスが悪いな、と語尾に被せた。思うに、最初のページに家族の相関図を入れるべきじゃないか。そうしたら一発で解る。主要な登場人物の名前から矢印が伸びていて、親友とか妻とか互いの関係性が書いてあるやつ。この本にはあれが要る。絶対要る。

そうか、と私は唸った。それから本の概略を説明し、ジャンパーズカートさんの人となりやそれとなくヒアリングした。無い知恵を絞って好印象を抱かれそうな感想を練り上げると、珈琲は冷め切っていた。

後日、恋人にその話をした。それって相談じゃなくて惚気だったんじゃないの、と彼女はクスクス笑った。どうやら文脈が読めていなかったのは私の方らしい。本棚に向かい「恢復する家族」を開く。表紙の裏で著者近影のオーエ先生が恥づかしそうに笑っていた。

【エッセイ】 冬至の灯

阿瀬みち

太陽が極大期に入ろうとしているという。太陽活動が活発でも冬至の到来には力及ばずとみえて、異常な暑さの秋も日照時間が短くなるにつれて気温

が下がり、木枯らしが吹き荒れはじめた。物理的にも体感的にも寒いが懐も寒い。ロシアとウクライナが戦闘をはじめてから燃料などの原材料費が高騰しており、じわじわと物価が上がっている。「せんそうはいんふれよういん」どこかで聞きかじった言葉を呪文のように唱えてみると、だんだんと実感が湧いてくる。白菜四分の一カットが158円。針のように細く切られた白菜を手にするたびに切なくなる。少し前まで同じものが特売で88円だった。たつぷりの野菜であふれた鍋など夢のまた夢である。高騰しているのは露地ものの野菜のみではない。米も震えるほど上がっている。買物にいくたび頭が痛くなり、もやしや豆腐でしいている。ニューズ番組では強盗、殺人、放火、おどろおどろしい文字が踊り、懐だけではなく心もわびしい。生活の苦しさや世相の険しさにたじろいで、フィクションが読めなくなってきた。というよりも、現実とフィクションの境界がいまいちになったと言えはいいの。SNSがもたらしたものはあらゆる集団間の分断だったのではないか。塔が崩れたと感じ始めたのはいつごろだったんだろう。アラブの春が直面した凍えるような冬の冷たさに気がつき始めたころだったろうか。自分もその分断に加担した一部だと自覚し始めた頃、傷つけた対象の存在に指先が凍りついた。SNSの殺伐とした雰囲気

気に影響されることすら体力が追いつかなくなり、最近はおつばら大きな二度の世界大戦前後を生きたひとたちの本を読んでいる。はじめは戦争と経済の関係を論じた本がきっかけだった。今は第二次大戦前夜の趣を残すマックス・ウェーバーを読んでいる。そういえば私は一緒に怒ってくれる人間ではなく、いま生きていては私よりも先に、きちんと絶望した人間の言葉を求めていたのだ。現実から目をそらさずに考え続け、誰よりも深く状況を理解し、恐怖や絶望とともに生きて人間が後世に託した希望が。今日より悪くなるかもしれない明日を照らしてくれる。激動の時代を生き、死んだ人間の言葉に向かうとき、わたしもまた言葉を手放すべきだった。他者の生き死にの轍をなぞるときにだけ指先に点る光がある。

【エッセイ】 断末魔で生きている

豊田 啓介

私は誰がなんと言おうと作家なのだ。浅ましくも自分に言い聞かせているのは、私の現状が作家とは言えないからである。

そんな私がエッセーを寄稿する機会をいただいたというのは、非常に喜ばしい事態なのだ。

ようやく日の当たる場所に、自分の文

章を出せた気がする。

土から這い出した若葉が四方に身体を伸ばすように、私もまた生き生きとしてエッセーで描くべき経験を、頭から指先へ巡らせようとしている。

どういうワケか、指は一向に動かない。語れるほどの人生が無い、という事だ。どうにかして格好の良い形にしたいと思つたが、それではエッセーというよりエッセになりかねない。

せつかく生まれた活力が、途端にしぼんでいくような心地になる。

語れる事が無いと、行き着く先は自己紹介の延長である。

冒頭にも述べた通り、私は作家ではない。

正確には、(同人台本) 作家兼配信者になつてしまつている。

自慢できる要素と云えば、台本の速筆とアイデアストック。

配信における、悲鳴と断末魔だろうか。悲鳴と断末魔と書くと、ギョツとする方もいらつしやるだろう。

現実には苦痛を伴う叫びではなく、ゲームの話なのでご安心を。

視聴者にとつて、配信者の悲鳴は非常に愉快な物なのだ。

道徳を疑いたくなる状況だが、なぜそうなるのかを簡単に説明したい。

ゲームという物は、たいていの場合は勝ち負けのルールが設定されている。

負けの場合や、自分の思われないような状況に陥つた時。あるいは、キャラクター

の死がもたらされる事も珍しくない。

そういった状況で無意識に出てしまふ叫びが、非常に好評なのである。

「うわあつ！」

というスタンダードな物から意味不明な叫びだったり、「おのれアイツうう！」という台詞など、そのバリエーションは実に豊富である。イントネーションや声の圧は毎回変わるため、同じ叫びは二度と味わえない。

無論、ただ叫べば喜ばれるという物でもない。

例えば、

「ここに殺人鬼は居ないよ」

と言つた直後に始末される。等、お膳立てをするのも視聴者が盛り上がるコツだ。

小説より断末魔と台本を上げる私を、かつての(たつた五年前)の私は容認できるのだろうか？

かつて目指した物から大きく逸れた現状。

だが、断末魔が固定ファンを繋ぎ止めてくれている。

叫びはそのまま同人作品の宣伝へと繋がり、結果私は創作を続けられている。

断末魔で生き、産まれる物がある。

そんな奇妙な状況が、今はとても愛おしくも感じられるのだった。

掲載作品募集

会員の皆さまの積極的なご応募をお待ちしています。

「ニューズレター」「とと」

原稿はワード形式で事務局へお送りください。(送信時には件名に『とと掲載用』と入れてください)

- ◆ エッセイ等 八百字以内
- ◆ 詩 四百字以内
- ◆ 短歌 三首以内
- ◆ 俳句 三句以内

「とと」は年二回発行ですが、一回につき掲載できるのは四作品程度です。先着順で掲載できない場合は次号に回します。

ホームページ「作品広場」

原稿はワード形式で事務局へお送りください。小説、エッセイ、評論、児童文学、詩、俳句、短歌などオリジナルの作品に限ります。

最新掲載作品

現代詩 「バラの言葉」 中本祐子

作品、募集要項はホームページで
<https://www.t-bungaku.com/plaza.html>



三田文学「新同人雑誌評」に 旗原理沙子さん「ちりともゆ」掲載

三田文学第一五九号（二〇二四年秋季号）の新同人雑誌評で徳島文学第七号が取り上げられました。収録作品の旗原理沙子さん「ちりともゆ」について、慶應義塾大学文学部准教授の加藤有佳織さんに詳しく解説していただいています。

当該号は三田文学ホームページから購入可能です。ぜひご覧ください。

<https://www.mitabungaku.jp/ba/cknumber159.html>



四国大学 第三回

瀬戸内寂聴 青春

エッセイコンクール

四国大学主催、徳島文学協会協賛で運営する「四国大学第三回瀬戸内寂聴青春エッセイコンクール」は、応募総数八十八作品の中から厳正な審査を行い、大賞、優秀賞、奨励賞の各賞が決定した。

大賞（一作）

「諦めるのは、悪いことか」

受川由佳子

二ストインターナショナルスクール

【タイ】

優秀賞（四作）

「数の障害と私」 高橋聖花

未来高等学校 【徳島県】

「失敗から得た新しい自分との出会い」

瀬部響太郎

徳島県立池田高等学校 【徳島県】

「自分の言葉で発信することの大切さ」

吉岡美和

中央大学杉並高等学校 【東京都】

「通信制高校の青春」 堀井みさと

目黒日本大学高等学校 【東京都】

大賞については、受賞者の言葉と受賞作品が、徳島文学協会発行の文芸雑誌『徳島文学』に掲載される。

四国大学 第五回

富士正晴全国高校生

文学賞

四国大学主催、徳島文学協会協賛で運営する「四国大学第五回富士正晴全国高校生文学賞」は、審査対象となった二二〇作品の中から厳正な審査を行い、大賞、優秀賞、奨励賞、佳作の各賞が決定した。

大賞（一作）

「芽吹踊り」 石川六花

岩手県立盛岡第一高等学校

【岩手県】

優秀賞（三作）

「駐車場の犬」 渡邊紗月

東日本国際大学附属昌平高等学校

【福島県】

「デュワーズ!!」 佐藤文菜

仙台市立仙台高等学校 【宮城県】

「おにぎり」 桑田愛

白陵高等学校 【兵庫県】

大賞については、受賞者の言葉と受賞作品が、徳島文学協会発行の文芸雑誌『徳島文学』に掲載される。

「ここ」：古代エジプト文明の知恵の神「トート」

に由来する。

会員の皆さまのご活躍

会員の皆さまが受賞された文学賞をご紹介します。

文学賞を受賞された方は事務局までご連絡ください。詳細は「とと」六ページをご覧ください。

■第四十四回全国万葉短歌大会
一般の部 佳作 如月玲

■令和六年度
芭蕉蛤塚忌全国俳句大会
大垣市長賞 涼野海音

■第二十二回とくしま文学賞

連句部門 最優秀 能山木野子

※西條裕子・竹内菊・東條士郎各氏と合同

佳作 能山木野子

※竹内菊・関真由子・石本昇弦各氏と合同

随筆部門 優秀 尾野森生

佳作 鉄線

短歌部門 佳作 峯菜実子

のやまきのこ

川柳部門 佳作 のやまきのこ

文学イベント案内

一部の講座に関して、非会員の皆様のご参加が可能になりました。
会場と Zoom 開催の両方で受付しているものもございます。
お申込みの際に、どちらでご参加するかお申し出ください。

徳島文学協会ホームページ
イベント情報



小説エキスパート講座

全国公募の文学賞で最終選考程度の実力のある方やプロの作家を目指している方。また、作品を提出した上で講師からの指名があった方を中心に、本格的なスパーリングを行います。参加のみはどなたでも可能です。

* 未完成作品の提出はご遠慮ください。

- 開催日 ①4月5日(土) ②7月5日(土)
全回21時～22時
- 開催方法 『Zoom』による開催
- 参加費 作品提出: 会員3,000円/学生会員1,000円
参加のみ: 会員1,500円/学生会員500円
非会員2,500円 ※
- 提出作品 原稿用紙50～200枚
- 講師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 定員 10人程度
- 締切 開催日の10日前まで(先着順)

作品の提出方法

Microsoft Word ソフトで書かれた小説(400字詰め原稿用紙換算50枚から200枚程度)を事務局宛てにメール添付でお送りください。

短編小説講座

初心者から、短編小説の書き方を極めたい方まで、どなたでもご参加いただけます。参加者の作品を組上に載せて合評したり、プロの作品を取り上げ講師が講義を行ったりします。

* 未完成作品の提出はご遠慮ください。

- 開催日 ①5月10日(土) ②8月23日(土)
全回19時～20時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 場所 徳島県立文学書道館
- 参加費 作品提出: 会員3,000円/学生会員1,000円
非会員 30枚程度7,000円
50枚程度10,000円 ※
参加のみ: 会員1,500円/学生会員500円
非会員2,500円 ※
- 提出作品 原稿用紙50枚位まで
- 講師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 定員 15人程度
- 締切 開催日の10日前まで(先着順)

作品の提出方法

Microsoft Word ソフトで書かれた小説(400字詰め原稿用紙換算50枚程度まで)を事務局宛てにメール添付でお送りください。

「私のイチオシ本」

お気に入りの小説やマンガなどを持ち寄り、1人1作品、持ち時間5分でプレゼンします。作品の魅力に改めて気づいたり、読書の幅を広げることができます。

- 開催日 2月23日(日・祝) 19時～20時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 場所 徳島県立文学書道館
- 参加費 会員のみ対象 500円
- 定員 15人程度

※プレゼン後の投票で1位に選ばれた方は、ととに書評(1000字程度)をご寄稿いただきます。お礼として500円の図書カードを差し上げます。

現代詩講座

詩人の清水恵子さんを講師にお招きし、詩を中心とした芸術作品・文学作品全般についてお話いただきます。

- 開催日 3月8日(土) 14時～15時30分
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 場所 徳島県立文学書道館
- 参加費 会員 1,000円/非会員 1,500円※
- 講師 詩人・清水恵子
- 定員 15人程度
- 締切 開催日の10日前まで

エッセイ講座

どなたでも文章スキルを身につけることで、素敵な文章が書けるようになります。参加者の作品を組上に載せて合評しながら、人を惹きつけるようなエッセイの書き方をお伝えします。

- 開催日 6月14日(土) 19時～20時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 場所 徳島県立文学書道館
- 参加費 会員・非会員※ 1,500円
- 講師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 定員 15人程度
- 締切 開催日の10日前まで

作品の提出方法

Microsoft Word ソフトで書かれたエッセイ(400字詰め原稿用紙換算5枚程度)を事務局宛てにメール添付でお送りください。

※非会員の方のご参加について

ご参加希望の方は事務局までメールでお申込みください。

【ご参加の条件】

- ①Zoomの基本的な操作ができる(Zoom参加の場合)
- ②事前に参加費を支払う(振込手数料はご負担ください)

■講座参加費と作品提出料は、後日とりまとめた上、請求書と払込取扱票を年2回お送りいたします。

■Zoomでの参加方法がわからない方は、無料でサポートいたします。お気軽にお問い合わせください。

ご入会や講座のお申込み・お問合せは
徳島文学協会事務局まで

〒771-3201 徳島県名西郡神山町阿野字方子 103
TEL : 080-6284-0296 society@t-bungaku.com
<https://www.t-bungaku.com/>